

# 京都上七軒花街の発生と展開

主席研究員 井上 年和

## 1. はじめに

上七軒は京都最古の花街といわれており、室町時代に一部焼失した北野天満宮を再建させたときに残った残木で、東門前の松原に七軒の茶店を建てたのが由来と伝えられている。

しかし、これまでにその成立過程やその後の変遷についての研究はなく、明らかにされていない。

そこで、本稿では中世から近世、近代、現代に至るまでの上七軒花街の発生とその後の展開について記述したい。

## 2. 中世における北野の茶屋

### 2-1. 北野茶造りと「茶屋」の出現

『祇園執行日記』によると、祇園社を訪れた客人が「北野茶」を所望したという記事がみられる。

『北野社家日記』をみれば、15世紀後半頃には北野社で茶の製造をしている記事が見出され、北野社では自らが茶の製造・販売に関わり、京都に北野茶を流通させていたと考えられる。

また、明応9年(1500)4月6日には「神供用」の茶つみを行っているし、その後も近世を通じ「神供用」の茶を取り扱っている茶屋の存在がみられる。

北野社周辺で「茶屋」の記事が確認されるのは、『北野社家日記』延徳2年(1490)4月10日条の「御千茶屋」をはじめ、同日記の明応元年(1492)9月6日には茶屋が松の木を引き寄せた記事、明応2年(1493)の「御子茶屋」や、明応9年(1500)には、北野荒所(巷所)の地子注文事に6件の茶屋の存在が確認される。

表1 北野での茶造り年表

年月日	内容	出典
観応元年(1350)3月23日	祇園社の執行に来た客が北野茶を所望	祇園執行日記
延徳3年(1493)4月11日	北野社目代が「御下用」の茶摘み	北野社家日記
明応8年(1499)4月2日	北野社宮仕の下女が「神供用」の茶詰め	〃
明応9年(1500)4月5日	北野社宮仕が神供御茶つみ	〃

表2 中世における北野の茶屋

年月日	内容	出典
延徳2年(1490)4月10日	北野社閉籠士一揆衆二名が御千茶屋・玉酒屋前で死亡	北野社家日記
明応元年(1492)9月6日	茶屋が松の木を引き寄せる	〃
明応2年(1493)3月24日	御子茶屋が放火される	〃

表3 北野荒所屋敷夏地子注文事

所在・用途	名前	間口	奥行	一季地子
茶や	三郎大郎	2丈7尺	8丈	122文
茶や	道せん	1丈2尺	3丈	20文
茶やのされはか事	二郎三郎	2丈	4丈	50文
茶や西つら	孫三郎	3丈7尺	9丈	167文
かいとりまこ 茶や	与三郎			53文
茶や新ひらき	孫三郎	3丈	9丈	100文

これらの茶屋は、参詣人に茶を振る舞うのみではなく、その用途に応じ様々な役割を果たしていたと考えられる。

## 2-2. 御子茶屋

明応2年(1493)3月24日には、北野社祠官家である松梅院の西隣にある「イ子」という御子の茶屋が、放火の被害者であるにもかかわらず、社頭や松梅院の近所であることから移転を命ぜられている。

御子茶屋の機能としては、北野社で製造した茶を神供用として取り扱うことや参詣人への茶の振る舞い、北野社に参詣や参籠へ訪れた貴人の接待等が考えられる。

北野社では、室町時代から一切経会や将軍参籠等の諸々の行事の度に、芸能興行の開催やそれにあわせた見世が出され、貴賤が群集していたし、応永33年(1426)8月9日、34年(1427)8月26~28日には足利義持が参籠後に松梅院に宿を訪れ、また、永禄6年(1434)3月21日には伏見宮貞成親王が折詰を用意し、女官や采女を従えて一切経会を訪れているし、永禄10年(1438)3月27日には、義持の参籠中にも女中を従えて酒宴を饗している。

このように、松梅院は室町時代には宮廷や将軍家との関係が深く、北野社東門前と梅松院の間に位置する御子茶屋は、重要な役割を担っていたと考えられる。

## 2-3. 五軒茶屋の測量

『北野天満宮史料 目代記録』によれば、天正17年(1589)4月27日に五軒茶屋の測量が行われている。それぞれの間口は2間、1間半1尺7寸5分、2間、2間7寸、1間半2尺6寸で、「惣打西ノ口9間5尺2寸5分」となっているから、西面した総間口9間5尺2寸5分、奥行4間半の長屋であった。

この五軒茶屋は、西側を表としていると考えられるので、近世の古図では北野社東門前に描かれる七軒茶屋の一部か、その他の南北通の道沿いに存在したと考えられる。しかし、松梅院が日記へ書き記すとすると、松梅院の西隣である可能性が高いと思われる。

同史料の天正17年(1589)4月29日条には、検地に来た前田玄以に茶屋を「居茶屋」にするよう命じられているが、これは、近世の上七軒遊廓の始原となる居茶屋が設置されたという解釈や、掛茶屋も仮設的な建物とはいえ、地子を取り立てようとしたという解釈が考えられる。

## 3. 七軒茶屋の成立

「七間(軒)茶屋」が文献上で確認されるのは、『北野社家日記』元和4年(1618)12

月10日条である。古図により確認されるのは、承応3年（1654）『新版平安城東西南北町并洛外之図』で、北野社東門前に七軒茶屋が所在しているのがわかるが、この七軒茶屋と同一のものと考えられる。

この記事によると七軒茶屋は太閤の時代には日小屋のようなもので、常設の建家となったのは16世紀後期から17世紀初期とすることになる。

『寛永十四年洛中絵図』（1637）では、七軒茶屋は間口14間の「町家」として描かれているが、宝暦7年（1757）の『北野天満宮地図』では、七軒茶屋は5軒が西面しており、残りの2軒は須魔町通（旧今出川通、現上七軒通）と五辻通の交差点に付き出し南面して描かれている。

天正17年（1589）の五軒茶屋の店主は、七郎左衛門・孫左衛門・二郎兵衛・二郎左衛門・与三郎とで、この記事の七軒茶屋の店主は、宗久・与左右衛門・新次郎・孫四郎・五郎兵衛（弥七郎）・源七・甚太夫とすべて異なっているが、年代差が29年あるので、七軒茶屋が五軒茶屋を引き継いだのかどうかは判らない。

しかし、七間茶屋の前身が梅松院西に存在し、豊臣秀吉に地子を免じられたことは間違いなさそうである。つまり、15世紀後期に松梅院西隣にあった御子茶屋が立ち退いた後、16世紀中に五軒茶屋が建てられ、天正から元和4年までの間に七軒茶屋となった可能性が高いと考えられる。

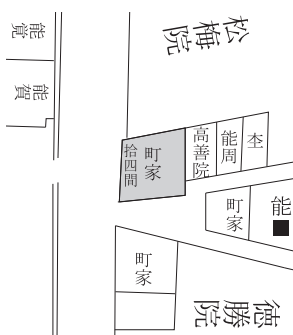


図1 洛中絵図  
（寛永14年 1637）  
七軒茶屋は西側の間口が14間の町家として描かれている。

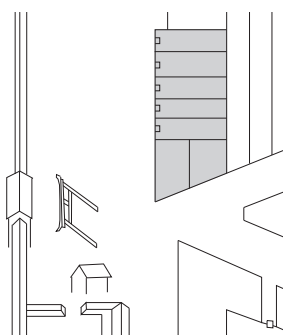


図2 北野天満宮地図  
（宝暦7年 1757）  
七軒茶屋は西向きに5軒、南向きに2軒の茶屋が配されている。



図3 京都地籍図  
（大正元年 1912）  
七軒茶屋跡地の5筆は北野神社の所有となっている。

## 4. 江戸期における北野社周辺の茶屋

### 4-1. 18世紀前期頃の様相

『京都御役所向大概覚書』をみると、洛中の茶屋数は宝永4年（1707）10月18日時点で北野54軒、祇園169軒、清水111軒の合計334軒となっている。また、「水茶屋」については、

「茶屋」と別項目となっており、祇園近辺における水茶屋数は記載されているが、北野社近辺については記載されていない。

これは、北野社の場合、水茶屋も「茶屋」に含まれているためと考えられる。

北野社東門前に位置する鳥居前町についてみると、戸数12軒に対し、茶屋数13軒と、茶屋数が戸数より1軒多いが、これは、東門前南側の水茶屋が茶屋に換算されているためであると考えられる。その他の12軒は、東門前道路（旧今出川通と五辻通の合流点）北側の「七軒茶屋」とその周辺及び道路南側の町屋であると思われる。

真盛町は、鳥居前町から南東方向へ延びる旧今出川通（現上七軒通）沿の町であるが、戸数47軒に対し、茶屋数が19軒で茶屋率が40%となっている。このうち1軒は北野社の祠堂である徳勝院長屋の茶屋「坂本屋」が含まれる。

右近馬場は北野社中之森の水茶屋であると考えられ、10軒となっている。

馬喰町は、右近馬場東の御前通に面し、戸数30軒に対し、茶屋数6軒で茶屋率は12%となっている。

三軒町については、『洛外町続町数小名并家数改帳』では、「三軒町 五軒」に続き「七本松三軒町 六軒」となっているが（現立本寺南東辺り）に存在していた。『京都御役所向大概覚書』では「松下三軒町」の茶屋数は6軒となっており、茶屋率は100%となっている。

北野の茶屋は北野社東側の御前通沿いに集中しており、鳥居前町と馬喰町、右近馬場を合わせると29軒と北野の茶屋の5割を超え、北野社東部の真盛町が4割、南部の下之森に位置する七本松三軒町が1割という比率である。

表4 北野社周辺の戸数と茶屋数

	戸数	茶屋数	茶屋率	備考
鳥居前町	12	13	100%	1軒は北野社東門前南側の水茶屋か
真盛町	47	19	40%	
右近馬場		10		中之森の水茶屋か
馬喰町	30	6	12%	
三軒町	6	6	100%	戸数 七本松三軒町 茶屋数 松下三軒町

\* 戸数は荻野家文書『洛外町続町数小名并家数改帳』正徳4年（1714）

\* 茶屋数は『京都御役所向大概覚書』宝永4年（1707）10月18日

#### 4-2. 徳勝院長屋

徳勝院は北野社東門前の今出川通南側に位置し、松梅院、妙蔵院とならび北野社の祠堂三家に列せられていた。

『北野天満宮史料』によると、この徳勝院は明暦3年（1657）には既に茶屋を営んでいたことがわかる。徳勝院は北側が旧今出川通、西側が御前通に面しており、それぞれの通り沿いに長屋を貸し、茶屋を経営していた。この内、北側の茶屋は真盛町に属し「坂本屋」という屋号であった。



なっており、当時の繁華街としては少ない。

これは、北野社に現存する燈籠をみれば、北野社の宮仕達が宿坊を経営していたことが伺え、中世には北野社への参籠後に將軍等が宿泊した宮仕の居宅は近世には宿坊と化して旅行者達に宿を提供し、茶屋とともに上七軒花街を形成していたと考えられる。

## 5. 江戸期における北野社境内の茶屋

### 5-1. 北野社の区分け

北野社境内は、北門の北側を北之森、本殿および東門周辺を上之森、南門から二ノ鳥居までを中之森、二ノ鳥居から一ノ鳥居までを下之森と称し、江戸期においては各エリアの中に茶屋が存在していた。

### 5-2. 北之森の茶屋

北之森では、元禄14年（1701）6月4日に平野社へ続く新道が切り開く願書が出され、同年8月27日には御土居の幅2間を切り開いている。

京都大学総合博物館蔵『御土居絵図』をみると、北野社側の間口は2間2尺、紙屋川側の間口は3間2尺で門があり、道幅は2間となっており、記事と一致している。この図には北野社側に「出茶屋」が描かれており、既にこの頃から北之森に茶屋が存在したことが伺える。

宝暦元年（1704）6月8日には、この新道へ水茶屋を出店する許可願いが7人の連名により提出されている。内訳をみると、鳥居前町1名、御室1名、馬喰町2名、経王堂内1名、平野2名である。この内、鳥居前町の「和泉屋半兵衛」は東門前の七軒茶屋であり、馬喰町の「吉田屋市右衛門」も茶屋を営んでいる。

結局この願は許可されなかったようであるが、京都府立総合資料館蔵『北野社内社外境内之絵面』（明治初期頃 図4）をみると、北之森には「日小屋」が多く存在していた模様が描かれ、江戸期には北之森に出茶屋が増加していったことが伺える。

### 5-3. 上之森の茶屋

上之森では、絵画史料をみると、宝暦7年（1757）『北野天満宮地図』には東門外に出茶屋が描かれており、また、『北野天満宮九百年御忌万燈之図』享

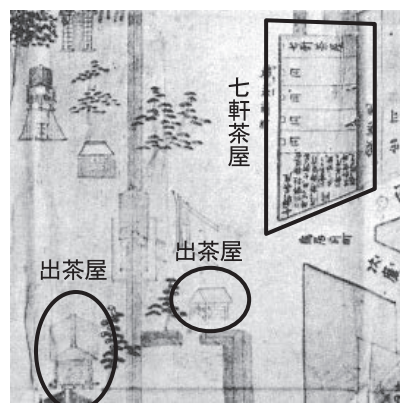


図5 北野社東門前の茶屋  
北野天満宮地図 宝永7年（1757）  
『社寺境内図資料修正2』より転載・加筆

和2年（1802）には、東門内南側に茶屋が描かれている。この東門内の茶屋の持ち主は七軒茶屋の年寄「和泉屋半兵衛」で、七軒茶屋は店のすぐ前である東門の中で出茶屋を出していた。しかし、上之森の東門周辺の茶屋は、明治になり七軒茶屋が消滅するとともに取り払われたと考えられる。

#### 5-4. 中之森の茶屋

『洛中洛外図（京博本）、（サントリー美術館蔵）、（歴博D本）』等や『北野社頭図』（寛永頃）をみると、三ノ鳥居脇で、また、長円寺蔵の『東山北野遊楽図』では、南門前で床机に座った男が茶を点てているのが描かれており、中之森では古くからこのような野点の茶屋が存在したことが伺える。

明暦3年（1657）には、北野社の祠官家である松梅院から「二軒茶屋」へ地子を課そうとしている記事が見られる。この「二軒茶屋」は、洛中洛外図や遊楽図に描かれているような野点の茶屋かは不明であるが、南門前に所在したと推測される。寛保2年（1742）には、南門前の石段下に、七軒茶屋の中の1軒である富田屋太兵衛より日小屋を建設する旨の願書が出されており、中之森の野点の茶屋は時代とともに簡易な構造である日小屋へと移り変わっていったことが判る。

宝暦7年（1757）『北野天満宮地図』や安永9年（1780）『都名所図絵』では、南門前の両脇に位置し、中之森の他の水茶屋と同じ構造の板葺きに石置屋根が描かれている。

南門前より南では、18世紀中頃に三ノ鳥居との間に6軒ほどの日小屋が存在していた。

中之森道筋東側の中村かめという店主が経営する日小屋に対して、寛延3年（1750）と宝暦7年（1757）の7年の間に2回の日小屋建て直しの願書が提出されている。

この願書には建物の構造も記されており、柱は掘立とし、屋根は「取葺」と言われる、木の皮や木を薄く殺いだ板等を竹や木の棧で押さえ、石を載せて風圧に耐えるようにしたもので、壁は葦簀を張り、それ以外には手摺を廻し、出入口は解放とした簡単な構造であった。

また、宝暦7年の願書には「年行事」として、「大黒屋十兵衛」の名が記されているが、この「大黒屋」は下之森に存在した「下七軒茶屋」の店主と考えられ、中之森の茶屋は下之森で茶屋を経営する店主が行事を勤めていたことが判る。

明治初期頃の『北野社内社外境内之絵面』をみると、この辺りには「日小屋」が立ち並ぶ様子が描かれているが、北野社南門前の古写真をみると、屋根が棧瓦葺きで、壁は漆喰塗りの常設的な建物に建て変えられた様子が判る。

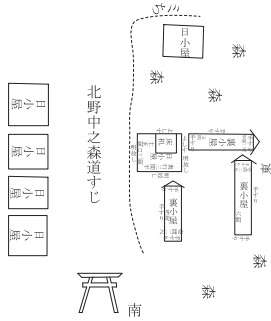


図6 中村屋日小屋建直願書  
寛延3年(1750)



図7 北野社南門前の茶屋  
北野天満宮地図 宝永7年(1750)  
『社寺境内図資料修正2』より転載



図8 明治期の北野社南門前  
(日文研データベース)

### 5-5. 下之森の茶屋

下之森でも江戸期を通じ、日小屋による茶屋が経営されていたが、明和6年(1769)に奉行に日小屋の建設願いが出されている。

この日小屋の敷地は、下之森の通りの南側で、中之森の日小屋同様、掘立柱に葦簀囲いを縄で搦め、取葺屋根とした簡単な構造であった。

享和2年(1802)にはこの通り沿いの日小屋は、北・南側とも仮の小屋掛から居小屋へ建て替えられ、下之森の茶屋は江戸後期から常設的な建物へと変化していった。

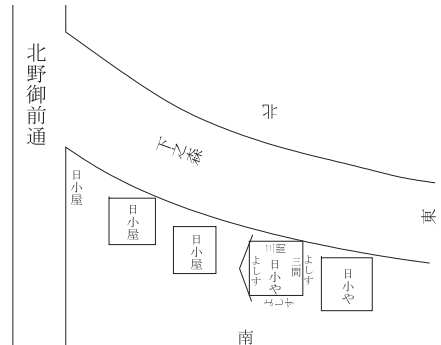


図9 近江屋そよ日小屋願書写  
明和6年(1769)

## 6. 茶屋の立地

中世において、北野社周辺に茶屋が存在したことは『北野天満宮史料』に記録が残るが、松梅院という北野社祠官家の西隣に存在した「御子茶屋」以外に具体的な場所が判る記述はない。

近世においては、「京都御役所向大概覚書」によると、真盛町という現在も茶屋が存する町以外に、鳥居前町、馬喰町といった北野社の東側に茶屋が存在したようである。

鳥居前町、馬喰町は近世の地図を見ると、ほとんどが宮仕の居宅であり、宮仕は宿坊を経営していたから、この2町は茶屋と宿坊が混在した街であったことになる。

鳥居前町内では北野社東門の正面に「七軒茶屋」という上七軒花街の発祥となった茶屋が存在したことも近世の古絵図から見て取れる。

また、北野社祠官家の一つで、茶屋に長屋を貸していた徳勝院は真盛町に属しているが、

明治以降社家長屋町という町名を名付けられ、歌舞練場が建設された。

明治になり、神仏分離により、北野天満宮の宮仕であった松梅院、徳勝院、妙蔵院の祠官3家の他、目代、34の子院が廃院となり、鳥居前町、馬喰町の茶屋や宿坊は消滅したと考えられる。『京都府下遊廓由緒附図』を見ると、明治7年（1874）では、馬喰町の茶屋は早くも消滅しているが、鳥居前町や社家長屋町には茶屋が存在したようである。

## 7. 茶屋数の推移

近世において、上七軒の茶屋について具体的な内容を示す資料は、『京都御役所向大概覚書』（宝永4年 1707）で、北野社の東に所在する真盛町、鳥居前町、馬喰町の各町に存する茶屋数が記されている。また、「右近馬場」の茶屋数も記されているが、これは、北野社境内に建てられた仮設的な茶屋（掛茶屋、出茶屋）のことを示すと考えられるので、北野の茶屋は38軒、掛茶屋も併せると48軒存在したこととなる。

安政初年（1850頃）に書かれた『煙花新議』では、「客請の者71軒」、「遊女芸者廻し方の店4軒」とある。「客請の者」とは「貸座敷」、「茶屋」等の接客を行う店を示し、「遊女芸者廻し方の店」とは、「小方」、「置屋」等の芸舞妓、娼妓を抱え、店に送り出す派遣業者を示すと考えられる。この2つの資料を比較すれば、建物内部で接客を行う「茶屋」は18世紀初期から19世紀中頃までの約140年間で38軒から71軒へ33軒増加していることとなる。

近代以降については、「京都府統計書」で明治16年（1883）から昭和17年（1942）まで、昭和26年（1951）以降は「北野をどり」パンフレットにより、茶屋数の推移が確認できる（図14）。

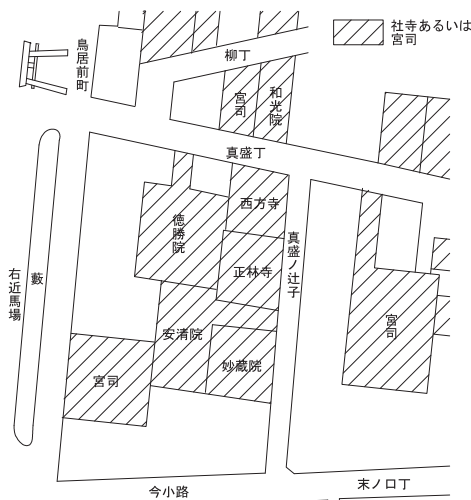


図10 元禄十四年實測大絵図 元禄14年（1701）

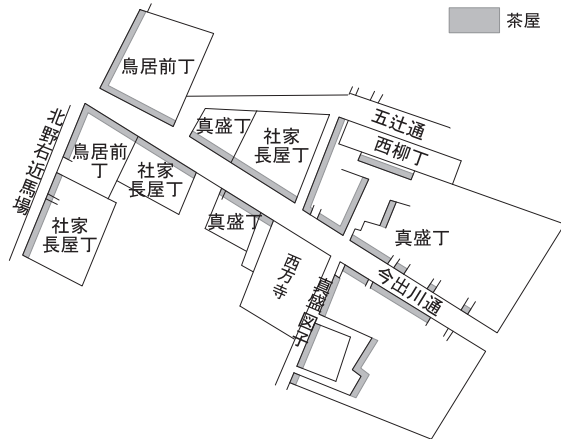


図11 京都府下遊廓由緒附図 明治7年（1874）



図12 京都市明細図（昭和20年代）



図13 現在の七七軒街区図

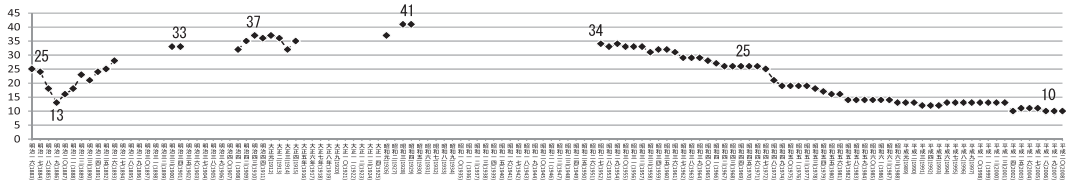


図14 七七軒お茶屋（貸座敷）数の推移

これを見ると、明治16年（1884）から同19年（1886）にかけて、25軒から13軒と12軒減少するが、明治7年（1885）の『京都府下遊郭由緒附図』（図11）と『京都市明細図』（図12）の茶屋位置を見比べてみると、北野社東門前の茶屋が消滅していることに対応している。

しかし、この後暫増し、明治後期には30軒台となっている。これは、享保15年（1720）の西陣大火により移転した正林寺跡地の西方寺南側一画が開発され、新たな茶屋街区が形成されたためである。

昭和3年（1928）には最高で41軒に達するが、第2次世界大戦以降は衰微し、昭和49年には20軒以下となって、現在は10軒となっている。

表5 七七軒の茶屋数

	宝永4 (1707)		安政初年(1850頃)		大正15(1926)		
茶屋等	真盛町	19	客請の者	71	茶屋	37	
	馬喰町	6	遊女芸者廻し方の店	4	小方	30	
		合計	48	合計	75	合計	67
資料	京都御役所向大概覚書		煙花新議		技芸倶楽部4巻7号		

## 8. まとめ

上七軒花街の中世から近世、近代、現代に至るまでの変遷をまとめた。

その結果、中世に発生した北野社門前の茶屋は、近世以降も宮仕が茶屋を経営し、北野社周辺の茶屋が境内に掛茶屋を設置するなど、北野社と密接に関わりながら発展した。

明治時代に廃仏毀釈・神仏分離の影響を受け、茶屋街の街区を変更しながら拡大していったが、第二次世界大戦後は徐々に数を減らしながら、現在も存続している茶屋街であることが明らかとなった。

## 9. おわりに

本稿は科学研究費助成事業（平成22、23年度挑戦的萌芽「伝統文化継承装置としての花街建築および景観の特性と計画論的課題」および平成24～26年度基盤研究B「伝統文化継承装置としての花街建築および景観の全国的実態と地域特性」）の成果の一部である。

### 参考文献

- (1) 井上年和、「上七軒の景観整備（老松北野店改修工事について）」、建築研究協会誌15、2009
- (2) 井上年和、「北野の七軒茶屋について」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第51号計画系、2011
- (3) 井上年和、「江戸期における上七軒花街の様相—上七軒花街と北野社宮仕との関係—」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2011
- (4) 井上年和、「江戸期における北野社境内の茶屋」日本建築学会大会学術講演梗概集、2012
- (5) 井上えり子、井上年和、「旧森留の建築的特徴と変遷—上七軒の茶屋建築その1—」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第52号計画系、2012
- (6) 井上年和、井上えり子、「旧杉浦の建築的特徴と変遷—上七軒の茶屋建築その2—」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第52号計画系、2012
- (7) 井上年和、井上えり子、「京都上七軒花街の変遷」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2013